様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｈ０２４７９

研究課題名（和文）アメリカ思想における共和主義・立憲主義・リベラリズム：民主政を制御する諸構想

研究課題名（英文）Republicanism, Constitutionalism, and Liberalism in American Thought: Ideas for Controlling Democracy

研究代表者
宇野　重規（Uno, Shigeki）

東京大学・社会科学研究所・教授

研究者番号：００２９２６５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,040,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、アメリカ政治思想史の全体像を、現代の政治思想史研究の視点から再解釈するものである。その際、特に共和主義、立憲主義、リベラリズムの思想的伝統を重視し、さらにアメリカ固有の哲学的伝統とされるプラグマティズムに注目した。
　アメリカ建国期においては、ヨーロッパの共和主義や立憲主義との関係がこれまで知られていた以上に深いことがわかった。プラグマティズムについては、哲学的意義に止まらず、政治思想的にもアメリカのリベラリズムや民主主義に大きな影響を及ぼしたことが示された。現代についても、ロールズの『正義論』が、分析系の政治哲学として様々な展開を見せていることが明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　アメリカ政治思想史は、日本社会にとっても重要な意味を持っているにもかかわらず、これまでなかなか通史的な展望を示す研究が少なかった。その場合も特にリベラリズムの思想的伝統が強調されることがほとんどだったが、本研究は、アメリカ政治思想の展開における共和主義やプラグマティズムなど、リベラリズムとは異なる多様な伝統があることを示した。このことによって、アメリカ政治への理解が深まっただけでなく、民主主義を適切に制御していくための理論的な示唆が多く得られた。

研究成果の概要（英文）：This study reinterprets the entire picture of the history of American political thought from the perspective of contemporary study of history of political thought. It emphasized especially the traditions of republicanism, constitutionalism, and liberalism, and also focused on pragmatism, as an original philosophical tradition in America.
In the founding period of the United States, the relationship with European republicanism and constitutionalism was found to be much closer than ever known. It was shown that pragmatism had a great influence on American liberalism and democracy, besides its philosophical significance. It was also revealed that Rawls's theory of justice had various developments today, especially in the field of analytical political philosophy.

研究分野：政治思想史

キーワード：アメリカ思想　共和主義　立憲主義　リベラリズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　共和主義、立憲主義、リベラリズムはいずれも現代政治理論の重要テーマであると同時に、政治思想史研究においても、各国における思想の展開を把握する上で重要な視点を提供してきた。いずれのテーマについても研究の蓄積は多いが、アメリカ思想を舞台とするとき、その特徴を以下のように示すことができる。

共和主義：ジョン・ロック以来の自由主義的伝統をもってアメリカの政治思想史の主流とみなす伝統的な歴史観（代表的なものとしてルイス・ハーツの *The Liberal Tradition of America*, 1955）に対し、1960 年代以降、バーナード・ベイリンの *The Ideological Origins of the American Revolution*, 1967 や、ゴードン・ウッドの *The Creation of the American Republic, 1776-1787*,1969 などの研究によって強調されたのが、アメリカ思想における共和主義的伝統である。この共和主義的伝統は、個人の利益よりは社会の共通善の実現を志向する市民の徳を強調し、中央権力の肥大化や腐敗を厳しく批判するものであった。共和主義的伝統を重視する歴史観に対してはメリル・ジェンセンらによる反批判があるものの、現在においてもなお、政治哲学者のマイケル・サンデルによる *Democracy's Discontent*, 1996 などに対し、多大な影響を与えている。

立憲主義：立憲主義とは権力分立や個人の人権の尊重を通じて国家権力の制限をはかる構想であるが、アメリカの場合、イギリスの慣習法的な不文憲法に対し、硬性の成文憲法を持ち、さらに連邦最高裁を頂点とする独自の違憲立法審査制を発展させてきた点に特徴がある。さらに連邦制によって連邦政府と州政府の権限を明確に区分するなど、独特な立憲主義の伝統を築いてきた。このようなアメリカの立憲主義については、建国期にジェームズ・マディソンらによって明確な理論化が行われたが、現代を代表する憲法学者のブルース・アッカーマンはむしろ、大統領と議会が別々に選ばれるアメリカ型の大統領制がしばしば党派による分断によって停滞する点を指摘し、制約された議院内閣制をより高く評価している。いずれにせよ、専門官僚制、中央銀行の独立を含め、立憲主義はなお、アメリカ政治の最重要論点であり続けている。

リベラリズム：すでに触れたハーツが主張するように、アメリカにおいてはヨーロッパから貴族制が持ち込まれることはなく、そのような封建的伝統に反発する社会主義の勢力も限定的であり、いわば広い意味での自由主義が支配的なイデオロギーの位置を占めた。共和主義、立憲主義もまた、広義の自由主義思想とつながるものである。しかしながら、アメリカ政治思想の顕著な特色は、20 世紀に至り、19 世紀的な「小さな政府」を批判して、むしろ政府の力によって個人の自由の実現をはかる 20 世紀的なリベラリズムが発展したことに見られる。このようなリベリズムの構想を代表するのは、言うまでもなくジョン・ロールズの *A Theory of Justice*, 1971 であるが、これに対してはサンデルを始めとするコミュニタリアンの立場からの批判があり、さらにロバート・ノージックらのリバタリアンからの批判も展開された。とはいえ、リベラリズムは依然として、現代アメリカ政治思想の中心的枠組みとなっている。

(2)　本研究ではさらに、19 世紀アメリカ思想における超越主義とプラグマティズムの思想の重要性に着目する。

　超越主義とは言うまでもなく、ラルフ・ワルド・エマソンやヘンリー・デイヴィッド・ソローなどによって築かれた思想である。人間の自律性と自己信頼、良心に基づく市民的不服従、自己を超える大いなる精神を強調する、アメリカ的思考の背骨を作った思想と言える。このような超越主義の思想は、その継承者であるプラグマティズムの思想によってさらに発展した。チャールズ・サンダース・パース、ウィリアム・ジェームズらによって構想されたプラグマティズムは、行為を通じた哲学的理念の実践的帰結に着目するものであり、超越主義によって強調された個人の自律性を社会的実践へと架橋すると同時に、諸個人の実践を社会的に媒介することを目指すものであった。このプラグマティズムは 20 世紀においてジョン・デューイによってさらに発展させられ、20 世紀的リベラリズムの大きな思想的背景となった。

　このように 17 世紀から 18 世紀にかけてアメリカで発展した共和主義が重視した市民の実践は、19 世紀における超越主義とプラグマティズムによって媒介されることで、20 世紀におけるリベラリズムに流れ込む。それと同時に、建国期に構想された立憲主義もまた、19 世紀から 20 世紀における経験を通じて変容し、やはり 20 世紀のリベラリズムを構成する重要要素となった。以上の見通しに基づいて、本研究は共和主義、立憲主義、リベラリズムを一つの思想的展開として把握し、その本質を個人の自律の領域の確保と独自の権力分立メカニズムによって民主政をよりよく制御するための構想として関連づける試みである。

２．研究の目的

(1)　上記のそれぞれの思想的伝統については、すでに研究の蓄積も多いが、これまで共和主義、立憲主義、リベラリズムの関連性や相互の結びつきが十分に検討されず、また権力制限を通じて民主政を制御するための構想であるという共通の性格が自覚されてこなかった。したがって、本研究では、相互の思想的伝統の関連性や結びつきを再確認すると同時に、民主政を制御するという共通の要素に着目しつつ、その違いを再検討する。すなわち、18 世紀における共和主義と立憲主義の交錯、19 世紀におけるプラグマティズムと 20 世紀のリベラリズムの連続・不連続、各時期におけるヨーロッパ思想との相互影響などを検討すると同時に、共和主義における市民

的な徳と古代ローマの共和政をモデルとする混合政体、立憲主義における個人の人権と権力分立のメカニズム、さらにリベラリズムにおける個人の基本権と正義を基底とする政治体制の間で、比較検討を行う。これらを通じて、最終的にアメリカ政治思想の新たな通史的展開の像を描き出し、さらには、現代民主主義をよりよく制御するための新たな理論的見通しを示すことが、本研究の課題となる。

(2)　本研究の最大の特色は、従来も個別的には研究されてきた共和主義・立憲主義・リベラリズムを相互に結びつけつつ、一つの歴史的展望として示そうと試みる点である。この点は従来の研究では等閑視されてきた視点であり、例えば、すでに名前を挙げたサンデルの歴史観において、共和主義はリベラリズムともっぱら対比されるばかりで、相互のつながりや共通の側面は必ずしも十分に検討されていない。また共和主義と立憲主義についても、多くの歴史的課題が共有されているにもかかわらず、相互に関連づける視点は乏しかった。さらにロールズ以降のリベラリズムは、歴史的文脈を十分に検討することなしに、自己完結的に研究が行われてきた。本研究は、これら研究史上の欠陥を埋めるものである。

　さらに本研究は、ヨーロッパ思想との相互影響を探ることを目指す。例えば、アメリカ共和主義は、英国のホイッグに一つの起源を持つが、立憲君主制と連邦制共和国という両国の違いもあり、両者は大きく異なる側面を持つ。また所有権を強調するリバタリアン的伝統はアメリカ固有のものであるが、ヨーロッパのロック的伝統やアナーキズムと比較することで、その意義はより鮮明となる。さらにアレントを始めとする 20　世紀における知識人のヨーロッパからの移動は、アメリカン・リベラリズムにも大きな影響を及ぼしている。本研究を通じて、単にアメリカ政治思想の新たな展望を得るばかりでなく、ヨーロッパ思想との比較によって、その含意や可能性の条件が示さすことも目的となる。

３．研究の方法

(1)　アメリカ思想における共和主義、立憲主義、リベラリズムについて、単に理論的に検討するだけでなく、歴史的・空間的に構造化して把握するため、研究メンバーを時代順（18 世紀・19 世紀・20 世紀）、および視点（アメリカ思想の展開・ヨーロッパとアメリカ）から成るサブグループに組織化する。それぞれの専門から研究を進めると同時に、相互の知見を関連づけ、問題意識の共有をはかる。

　18 世紀研究班については、アメリカ建国期の政治思想を研究することが中心的課題となる。研究メンバーは、これまでアダムズ、フランクリンを中心に研究を進めてきたが、今後はさらにマディソンら『ザ・フェデラリスト』を執筆した「建国の父」たちはもとより、大西洋を超えた君主制や立憲主義をめぐる議論の連続・非連続についても考察を加える。さらに、ハーツ以来のアメリカ政治思想における自由主義の優越性というテーゼについても批判的な検討の対象とする。さらに「デモクラシーと法の支配」の関係を中心に、17　世紀英国の政治思想が 18　世紀アメリカにどのように継承されていったかについても探る。同時にそのような思考が 20 世紀の政治理論にどのように受け継がれたかについても検討を加える。さらに、近年研究が活発に進んでいる大西洋を超えた啓蒙思想の展開（フランス啓蒙、スコットランド啓蒙とアメリカ啓蒙の連関）についても、考察の対象とする。

(2)　19 世紀研究班については、アメリカ思想の内在的展開に着目するならば、研究の主眼は超越主義とプラグマティズムとなる。研究メンバーはこれまでエマソン、ジェイムズを中心に研究を進めてきたが、さらにソローやホイットマン、パースらについても検討を進める。同時に、フランス人思想家で *De la démocratie en Amérique*(1835/40)の著者であるトクヴィルを中心に、ヨーロッパ人の目から見た同時代のアメリカ思想の展開についても考察する。また、英国自由主義との関連でアメリカ自由主義の展開を探り、さらにリベラリズムとプラグマティズムの関係についても検討を進める。また、アメリカに移入したアナーキズムと、ロック以来の所有権概念に重きを置くアメリカのリバタリアニズムとの関連についても探る。自由主義、社会主義、ロマン主義、アナーキズムといったヨーロッパの諸思想は、広大なフロンティアを抱えるアメリカ大陸でどのように変化したのか。このことを検討することで、本研究の課題である 18　世紀の共和主義、立憲主義から 20　世紀のリベラリズムへの展開を検討する。

(3)　20　世紀研究班については、プラグマティズムからリベラリズムへの展開、および亡命知識人の知的影響を介して、さらにロールズ以降の政治哲学へと発展する過程を検討することを課題とする。研究メンバーは、これまでデューイを研究してきたが、さらにその周辺の知識人（フック、ミルズ、ニーバーなど）について検討し、さらにウォーリンら現代政治理論家との関係についても考察を加える。また、これまでのロールズの正義論や平等論に加え、さらにロールズの影響を受けた第二世代、第三世代の研究者について検討を行う。とくにブレナンやトマーシらによる新古典派リベラリズム Neo Classical Liberalism がその影響力から言って、重要な研究対象となる。さらには「公共的理性のリベラリズム」も大きなテーマとなる。また、現在、アメリカ政治哲学で活発に論じられている「政治的リアリズム」をめぐる論争についても検証する。

(4)　20　世紀は同時に、アメリカ思想とヨーロッパ思想のダイナミックな交流が見られた時代でもある。その意味で、ベルらユダヤ系のニューヨーク知識人、そしてアレントに代表されるヨーロッパからの亡命知識人の研究が大きな意味を持つ。具体的には、ベルの脱工業化理論などを中心にニューヨーク知識人（多くはヨーロッパからの移民二世）の知的関心を探る。同時に、アリンスキーのコミュニティ・ディベロップメント運動を始め、都市問題や社会問題とヨーロッパ

の社会主義思想との関わりも検討する。さらにアレントやモーゲンソーなど、ヨーロッパからの亡命知識人がアメリカで果たした役割を検証する。

４．研究成果

(1)　研究の初年度にあたる平成 29 年度は、研究体制の構築をはかった。18 世紀研究班については、これまでアダムズを中心に研究を進めてきた石川敬史が、マディソンら『ザ・フェデラリスト』を執筆した「建国の父」たちはもとより、大西洋を超えた君主制や立憲主義をめぐる議論の連続・非連続についても検討を行った。その成果を「アメリカ連邦共和制における主権とは何か」と題して報告した。結果として、主権をめぐる論争において、予想以上にヨーロッパとアメリカとで思想的な相互影響があることが明らかになった。

20 世紀研究班については、谷澤正嗣がロールズの影響を受けた第二世代、第三世代の研究者について検討を行った。特に政治的責務論について、シモンズを中心に哲学的アナーキズムを考察し、その成果を報告した。乙部延剛は、現代政治哲学における分析系の哲学と、これに対抗する大陸系の政治哲学について検討を行い、その成果を報告した。これらの報告によって、英米の分析系哲学と、それに対する大陸系政治哲学の変化、及び英米の政治哲学内部における多様な潮流の位相が明らかになった。

(2)　研究の二年目にあたる平成 30 年度は、通史的な視点の確立と全体的枠組みの決定を目指した。その目的は、共和主義、立憲主義、リベラリズムを貫く座標軸を見定めることにあった。

この目的に向けて、まずは 18 世紀における共和主義と立憲主義の関係について集中的に検討を行った。その成果は、社会思想史学会において分科会「アメリカ政治思想史研究の最前線」を企画し、石川敬史が「初期アメリカ共和国における主権問題」を報告することにつながった。この報告は主権論に即して、初期アメリカにおける思想対立をヨーロッパの思想との連続性において捉えるものであった。

プラグマティズムとリベラリズムの関係についても考察を進めた。具体的には研究会を開催し、研究代表者である宇野重規が「プラグマティズムは反知性主義か」と題して報告を行なった。これはプラグマティズムを、アメリカ思想史を貫く反知性主義との関係において考察するものであり、プラグマティズムの２０世紀的展開を検討することにもつながった。さらに小田川大典が「アメリカ政治思想史における反知性主義」と題して報告を行い、アメリカ思想史の文脈における反知性主義について包括的に検討した。

さらに上記の社会思想史学会においては、谷澤正嗣が「A・J・シモンズの哲学的アナーキズム」と題して報告を行っている。これは現代アメリカのリベラリズム研究におけるポイントの一つである政治的責務論において重要な役割を果たしたシモンズの研究を再検討するものであった。人はなぜ自らの政治的共同体に対して責務を負うのか。この問題を哲学的に検討するシモンズの議論は、アメリカ思想におけるリベラリズムと共和主義の関係を考える上でも重要な意味を持った。シモンズを再検討することも、本年度の課題である通史的な視点の確立に向けて大きな貢献となった。

(3)　研究の最終年度にあたる平成 31（令和元）年は、これまでの研究を総括すべく、全体として共有する枠組みである共和主義・立憲主義・リベラリズム・プラグマティズムについて確認作業を行い、合わせてアメリカ政治思想史の展望を構想し、それを学会発表という形で形にした。

第一は、政治思想学会である。このうち、シンポジウム II において、研究代表者である宇野重規が「プラグマティズムは反知性主義か」と題して報告を行った。これはアメリカにおいてプラグマティズムが重要な思想的支柱になっていること、そこに特有の反エリート主義と反合理主義がみられること、にもかかわらず、独特な反権力主義や民主的参加の契機を持つことを論じたものであった。

第二は、社会思想史学会である。このうち、セッション H「アメリカ政治思想史研究の最前線」では、片山文雄が「建国期アメリカにおけるコモンセンスの政治学：スコットランド啓蒙との関連で」と題して報告を行い、石川敬史と小田川大典が討論を行った。また、研究協力者である上村剛（東大大学院）も「アメリカ啓蒙とは何か？」と題して報告を行った。このセッションは全体として、本科研プロジェクトの研究成果が結実したものとなった。

以上に加え、山岡龍一は「立憲主義と政治的リアリズム」、石川敬史は「アメリカ革命における主権の不可視性」などの論文を発表し、井上弘貴は日本デューイ学会で「ジョン・デューイと実効的自由」を発表するなど、プロジェクトメンバーによる論考や学会発表が相次いだ。これらはいずれも、本研究の成果を示すものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 井上弘貴	４．巻 第18号
２．論文標題 リベラリズムに背いて―ネオコン第一世代による保守主義の模索	５．発行年 2018年
３．雑誌名 政治思想研究	６．最初と最後の頁 41-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井上弘貴	４．巻 第52号
２．論文標題 ドナルド・トランプに先駆けた男―サミュエル・Ｔ・フランシスのペイリオ・コンサーヴァティズム	５．発行年 2018年
３．雑誌名 アメリカ研究	６．最初と最後の頁 63-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石川敬史	４．巻 53号
２．論文標題 ジョン・アダムズの混合政体論における近世と近代	５．発行年 2019年
３．雑誌名 アメリカ研究	６．最初と最後の頁 35-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山岡龍一	４．巻 66
２．論文標題 方法論かエートスか？：政治理論におけるリアリズムとは何か	５．発行年 2019年
３．雑誌名 政治研究	６．最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小田川大典	4．巻 61 巻
2．論文標題 戦後日本における歴史的政治学の展開	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本の教育史学	6．最初と最後の頁 63-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石川敬史	4．巻 5号
2．論文標題 収斂としてのアメリカ革命	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Nyx	6．最初と最後の頁 248-261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 前川真行	4．巻 45-20
2．論文標題 権力のエスノグラフィ、あるいは悪しき主体について	5．発行年 2017年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 220-237
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 乙部延剛	4．巻 45-21
2．論文標題 政治哲学の地平：分析的政治哲学と大陸的政治哲学の交錯	5．発行年 2017年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 283-293
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 乙部延剛	4．巻 4
2．論文標題 対抗する諸政治哲学：分析的政治哲学と大陸的政治哲学を中心に	5．発行年 2017年
3．雑誌名 ニュクスNyx	6．最初と最後の頁 204-219
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山岡龍一	4．巻 4
2．論文標題 政治的リアリズムの挑戦―寛容論をめぐって	5．発行年 2017年
3．雑誌名 ニュクスNyx	6．最初と最後の頁 236-249
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 井上弘貴	4．巻 124-1・2
2．論文標題 トランプをめぐるアメリカ保守主義の現在――旗幟を鮮明にする西海岸シュトラウス学派	5．発行年 2017年
3．雑誌名 法学新報	6．最初と最後の頁 33-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 Nobutaka Otobe
2．発表標題 System and Machine: Turns to Macro-Scale Analyses in Contemporary Democratic Theories
3．学会等名 IPSA 25th World Congress of Political Science（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 乙部延剛
２．発表標題 ＜政治的なもの＞とデモクラシー
３．学会等名 日本政治学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 小田川大典
２．発表標題 思想の力：バーリンにおける政治理論とインテレクチュアル・ヒストリー
３．学会等名 日本イギリス哲学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山岡龍一
２．発表標題 規範理論家としてのバーリン：冷戦リベラルからリベラルリアリストへ
３．学会等名 日本イギリス哲学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 石川敬史
２．発表標題 初期アメリカ共和国における主権理論の模索
３．学会等名 社会思想史学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 谷澤正嗣
２．発表標題 A・ジョン・シモンズの哲学的アナーキズム
３．学会等名 社会思想史学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 石川敬史
２．発表標題 イギリス領北アメリカ植民地の指導者層にとっての常識哲学
３．学会等名 イギリス哲学会第42回研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 井上弘貴
２．発表標題 戦後アメリカ社会の変容と新保守主義――ニュー・クラスをめぐる議論を中心に
３．学会等名 政治思想学会第24回研究大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計11件

１．著者名 宇野重規	４．発行年 2018年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 282
３．書名 未来をはじめるー「一緒にいること」の政治学	

1．著者名 待鳥聡史、宇野重規、苅部直、谷口功一、江頭進、鈴木一人、砂原庸介、田所昌幸	4．発行年 2019年
2．出版社 白水社	5．総ページ数 238（担当は19-42頁）
3．書名 社会のなかのコモンズー公共性を超えて	

1．著者名 君塚直隆、水島治郎、細田晴子、松尾英哉、桜田智恵、原武史、宇野重規	4．発行年 2018年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 312（担当は247-276頁）
3．書名 現代世界の陛下たちーデモクラシーと王室・皇室	

1．著者名 山下範久、岡本隆司、辛島理人、石川敬史、小笠原弘幸、ライカイ・ジョンボル、橋本悟	4．発行年 2019年
2．出版社 東洋経済新報社	5．総ページ数 456（担当は209-247）
3．書名 教養としての世界史の学び方	

1．著者名 松本卓也、山本圭、淵田仁、乙部延剛、大久保歩、柿並良佑、比嘉 徹徳、 信友建志	4．発行年 2018年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 272
3．書名 〈つながり〉の現代思想―社会的紐帯をめぐる哲学・政治・精神分析	

1．著者名 大瀧雅之、加藤晋、神藤浩明、宇野重規、本橋篤、古宮正章、西島益幸、釜賀浩平、随清遠、田村正興、渡部晶、内山勝久、薄井充裕、堀内昭義、塩川伸明	4．発行年 2017年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 263（36-52）
3．書名 ケインズとその時代を読む：危機の時代の経済学ブックガイド	

1．著者名 井手英策、宇野重規、坂井豊貴、松沢裕作	4．発行年 2017年
2．出版社 有斐閣	5．総ページ数 232（102-117，137-152，209-225）
3．書名 大人のための社会科：未来を語るために	

1．著者名 アンドルー・ゴードン、瀧井一博、イアン・コンドリー、稲賀繁美、井上章一、宇野重規、落合恵美子、苅谷剛彦、北浦寛之、楠綾子、篠田徹、デイヴィッド・レーニー、待鳥聡史、山田奨治	4．発行年 2018年
2．出版社 弘文堂	5．総ページ数 385（45-61）
3．書名 創発する日本：ポスト「失われた20年」のデッサン	

1．著者名 堀田新五郎、森川輝一、仁井田崇、川村文重、小田川大典、 加藤哲理、乙部延剛、平野啓一郎、小野紀明	4．発行年 2017年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 383(47-88)
3．書名 講義　政治思想と文学	

１．著者名 松本卓也、山本圭、淵田仁、乙部延剛、大久保歩、柿並 良佑、比嘉 徹徳、信友 建志	４．発行年 2018年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 272(101-123)
３．書名 〈つながり〉の現代思想―社会的紐帯をめぐる哲学・政治・精神分析	

１．著者名 伊藤邦武、新茂之、冲永宜司、藤井千春、小口裕史、浜野研三、柳沼良太、高頭直樹、 笠松幸一、松下晴彦、江川晃、加賀裕郎、早川操、苫野一徳、宮崎宏志、井上弘貴	４．発行年 2017年
２．出版社 世界思想社	５．総ページ数 280(248-262)
３．書名 プラグマティズムを学ぶ人のために	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	谷澤　正嗣 (Yazawa Masashi) (20267454)	早稲田大学・政治経済学術院・准教授 (32689)	
研究分担者	森川　輝一 (Morikawa Terukazu) (40340286)	京都大学・法学研究科・教授 (14301)	
研究分担者	片山　文雄 (Katayama Humio) (40364400)	東北工業大学・教職課程センター・准教授 (31303)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	石川　敬史 (Ishikawa Takahumi) (40374178)	帝京大学・文学部・准教授 (32643)	
研究分担者	乙部　延剛 (Otobe Nobutaka) (50713476)	大阪大学・法学部・准教授 (14401)	
研究分担者	小田川　大典 (Odagawa Daisuke) (60284056)	岡山大学・社会文化科学研究科・教授 (15301)	
研究分担者	仁井田　崇 (Niida Takashi) (70611630)	名城大学・法学部・准教授 (33919)	
研究分担者	前川　真行 (Maegawa Masayuki) (80295675)	大阪府立大学・高等教育推進機構・教授 (24403)	
研究分担者	山岡　龍一 (Yamaoka Ryuichi) (80306406)	放送大学・教養学部・教授 (32508)	
研究分担者	井上　弘貴 (Inoue Hirotaka) (80366971)	神戸大学・国際文化学研究科・准教授 (14501)	
研究分担者	小野田　喜美雄 (Onoda Kimio) (80754499)	東北大学・法学研究科・特任フェロー (11301)	